

愛媛大学医学部 同窓会会報

2020 NOVEMBER No.36

発行日／令和2年11月1日
編集発行人／薬師神 芳洋
発行／愛媛大学医学部同窓会
〒791-0295
愛媛県東温市志津川
TEL(089)960-5989
印刷／太陽印刷株式会社
TEL(089)932-2881



表紙紹介

昭和56年3月「3期生卒業写真」

CONTENTS

会長挨拶	2
卒業生からのメッセージ	3
新任教授からのメッセージ	5
活躍する卒業生	7
役員一覧	8
退職教授からのメッセージ	9
愛媛大学医学部同窓会会則 細則 申し合わせ事項	10
決算・予算・第36回総会報告	11
50周年に向けて、3期生雄志座談会	12
医学部ならびに愛媛大学でご活躍された先生	17
恩師をおたずねします	18
支部紹介	19
医学部課外活動(運動部)紹介	20
医学部医学科人事異動	22
あとがき	23
お知らせ	24

会長挨拶



We will meet again !

薬師神 芳洋 (昭和 63 年卒、10 期生)

愛媛大学大学院医学系研究科 臨床腫瘍学 教授

同窓生の皆様、ご苦勞されていることと思います。今年はコロナのパンデミックで大変な一年でした。いや、いまだに大変です。

まず全ての学会は延期かWeb開催。私の回りの会議という代物は、ほとんどがインターネットの中です。私の嫌いなマスクも、みなさまの笑顔を包み隠し圧顔で蔓延しています。さらに大変な欧州では4月、エリザベス女王の英国民に向けたスピーチが、「We will meet again !」で締めくくられました (<https://www.youtube.com/watch?v=dsA9ythkSw4>)。誰しもが希求する一言だと思います。

今夏の同窓会総会(第36回)は総勢16人。批判もありましたが、多くの配慮のもと、記念講演はZoom開催。同窓生からは、「申しわけないが参加出来ない」との暖かいメールもいただきました。コミュニケーションの一つである会話は、主に視覚と聴覚でおこなわれます。一方、人としての「つながり」には、握った手の感覚、一緒に食べる料理やお酒の味、同じ空間を共有したという思いが必要です。どれほどの技術が発達したとしても、人を豊かにするのは「会う」ことなどなのだと感じた一日でした。

現在、臨床試験中のCOVID-19ワクチン候補は26種類。このほかに139種類が前臨床段階にあると聞きます(2020年8月現在)。早ければ年内にワクチン接種が開始されるはずですが。来年の同窓会総会(8月の第1土曜日：8月7日)には皆さんにお会い出来ます。3年後の50周年記念式典には、皆様と同じ空間を共有する事が出来ると信じています。

We will meet again !

厳しいこの時期、どうかまっすぐ進んで行かれますよう祈っております。





中川 雅裕 (平成3年卒・13期生)

(浜松医科大学医学部附属病院 形成外科 特任教授)

愛媛大学医学部同窓会の皆様、令和2年5月1日付けで浜松医科大学附属病院形成外科の特任教授を拝命しましたのでご挨拶申し上げます。私は1991年(平成3年)に愛媛大学医学部を卒業しました。卒業後は外傷で変形した顔面や手足をきれいに治す匠の技とも言える形成外科の細かな技術に憧れて東京大学形成外科に入局しました。東京大学形成外科ではマイクロサージャリーと言われる顕微鏡を用いた遊離皮弁による頭頸部再建や乳房再建、筋肉移植による顔

面神経麻痺の治療など世界でも最先端の手術が数多く行われていました。私はこのマイクロサージャリーに魅了されて再建外科の道を進み、群馬県立がんセンター、自治医科大学、埼玉医科大学などで再建手術を行いました。その後2002年、静岡県立静岡がんセンターの開院に伴い形成外科の初代部長となり、今回の浜松医大に赴任するまでの18年間も数多くの再建手術をしました。静岡がんセンターは国立がん研究センターやがん研有明病院と並ぶがん専門病院となり、形成外科の再建手術数でも全国で1、2を争うほどになりました。

浜松医科大学は静岡県西部のうなぎの養殖で有名な浜名湖の近くにあります。浜松医科大学形成外科は、当初は皮膚科の中の診療科としてありましたが、形成外科の働きがきちんと評価されなかったため1992年に一度解散し消滅してしまいました。そのため大学には形成外科がない時期が長くありました。しかし、大学の各診療科や地域病院から形成外科の開設を熱望されるようになり、2007年に独立した診療科として形成外科が新設されました。現在では県内外に24の関連病院があり、30名を超える医局員や50名を超える同門会員がいます。大学病院のため熱傷や外傷、先天異常、癩痕ケロイド、難治性潰瘍など形成外科全般の症例が集まりますが、頭頸部再建や乳房再建などの再建手術も数多く行っています。さらに様々な疾患に対応できるようにしたいと考えています。

浜松にはヤマハやスズキなどの大きな企業が数多くあり「ものづくりのまち」として地域全体で新しいものを創る気質にあふれています。私自身、光産業創成大学院大学(GPI)に入学し、大学院生として光工学やレーザーを用いた医療機器開発の研究も行っています。GPIは光工学分野での起業家を育てベンチャー企業の立ち上げを支援している大学院大学です。他業種の社会人と同級生となり、経営学や光工学などを勉強したり、担当教官や先輩・同級生と協力して研究をしたり、私自身も愛媛大学の学生時代に戻ったような気分で大学院生活を楽しんでいます。

浜松医科大学の教授とGPIの大学院生という2つの立場で大学の教員や企業の研究者、起業家、銀行員などの様々な業種の人々と協働することにより私自身の人生観に大きな影響を与えています。この経験を活かして、医局員や研修医、学生などに様々な局面に対応できる幅広い教育をしていきたいと考えています。



池田 俊太郎 (平成4年卒・14期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 地域救急医療学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、令和2年4月より地域救急医療学講座の教授に就任しました池田俊太郎と申します。1992年愛媛大学医学部卒業の14期生です。私は、小・中学時代は今治市で過ごし松山東高校卒業後愛媛大学に入学致しました。卒業後は愛媛大学医学部第二内科に入局し、愛媛県立中央病院及び国立療養所愛媛病院(現愛媛医療センター)で初期研修しました。1995年より愛媛大学大学院に入学し心臓アポトーシスに関する基礎研究を行い、大学院卒業後は愛媛県立南

宇和病院、市立宇和島病院と計17年間南予を中心に診療に従事して参りました。東予で育ち、中予で学び、南予で仕事をし、生粋の愛媛県人です。専門は循環器内科・カテーテルインターベンションです。現在は、市立八幡浜病院内にある地域救急医療学講座サテライトセンターと大学病院と両方とで活動しております。

地域救急医療学講座は、2010年に愛媛県の寄付講座として創設されました。八幡浜・大洲圏域では新臨床研修医制度の施行後から医師不足が深刻化し、八幡浜市の唯一の二次救急医療機関である市立八幡浜総合病院でも勤務医の減少から診療機能が低下し、特に救急医療に関しては、地域住民のニーズに応えられない状況となりました。そこで愛媛県が八幡浜・大洲圏域を地域医療再生計画の対象地域とし、愛媛大学医学系研究科に地域救急医療講座を設立しました。そして2016年からは八幡浜市の寄付講座として引き継がれています。

本講座は市立八幡浜総合病院内に地域サテライトセンターを置き地域医療を支援すると同時に、地域救急医療に従事する医師の養成、医学生・研修医の教育・指導、地域救急医療向上のためのシステムの研究・開発を行っています。現在本講座は、3名の内科医師と1名の小児科医師で構成されています。全国各地での救急医療体制の確立が叫ばれる昨今ですが、さらなる充実が必須と考えています。現在、臨床では愛媛大学附属病院での診療やカテーテルインターベンションを引き続き行わせて頂いており、今まで以上に学内外の先生方と協力しながら愛媛県の循環器救急医療・教育の発展に貢献していければと考えております。

医療者として私の一番好きな言葉は、愛媛大学医学部の基本理念である「患者から学び、患者に還元する医学」です。このコンセプトを最初に聞いたのは一回生の「医学概論」の講義の時でした。講義は大変充実しており初代名物教授方や、医師でもあり哲学者でもある中川米三先生が講義されていたのを記憶しています。そのなかで特に印象に残っているのは第2内科初代教授である國府達郎先生が「臨床からでた疑問を基礎研究で解明する。それをまた診療に還元するのが医者への努めや」とおっしゃられ感動したのを今でも覚えています。身は地域に置きながらも、大きな視点で“疾病”を目標にしていく、“think globally, act locally”を日々実践することが私の目標です。

浅学非才の身ではありますが、本学の発展のために尽力する所存ですので、愛媛大学医学部同窓会の皆様には今後とも何卒ご支援・ご指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。同窓会員皆様の益々のご清栄を祈念しつつ、池田からのご挨拶とさせていただきます。



中村 雅之 (平成7年卒・17期生)

(鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 精神機能病学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、令和2年4月1日付けで、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 精神機能病学分野 教授を拝命いたしました中村雅之と申します。私は平成7年(17期)に愛媛大学を卒業し、同大神経精神医学講座に、私を含めて愛媛大学卒業生同期7名とともに入局いたしました。当時は、柿本泰男初代教授が退官された後の教授選中であり、教授不在の教室でした。その後1年間、附属病院精神科神経科で研修を行いました。その間の平成8年1月に第2代教授として故田邊敬貴先生が大阪大学から着任されました。研修の後、佐野輝先生(現鹿児島大学長、当時愛媛大講師)と上野修一先生(現精神神経科学教授、当時愛媛大助手)のご勧誘に流されるように平成8年度に愛媛大学大学院医学研究科に進学することになったのですが、当時は研究には全くと言っていいほど興味を抱いていなかったのが実情です。両先生のご勧誘がなければ、おそらく全く違った道を歩んでいたことでしょう。両先生のご指導のもと精神神経疾患の分子遺伝学的研究の基礎を学び、平成14年4月から2年間米国Johns Hopkins大学精神科にポスドクとして研究留学をさせていただきました。その間に鹿児島大学教授に赴任された佐野先生のお誘いにより留学後に鹿児島に異動しました。前任の佐野先生が平成31年度に鹿児島大学長に昇任され、その後継として現職を拝命するに至りました。私が愛媛の神経精神医学教室で学んでいる間に多くの偉大なる先輩たちと出会うことができました。今思えば当時の愛媛の精神科では、故田邊敬貴教授のもと、前述の佐野輝先生と上野修一先生、堀口淳先生(島根大学精神医学講座前教授、当時保健管理センター助教授)、池田学先生(現大阪大学精神医学教室教授)、中川賀嗣先生(現北海道医療大学リハビリテーション科学部教授)など現在の精神医学のスター選手達が机を並べて切磋琢磨していた教室でした。振り返れば愛媛大学で学んだ研究分野としての精神神経疾患の分子遺伝学に加え、偉大な先輩方の教えや考え方、取り組む姿勢などを診療・教育・研究を通じて直接学べたことは大変貴重な体験であり、母校の愛媛大学で学んだ経験が現在の私の診療・教育・研究の礎になっていると考えています。学生時代から14年間慣れ親しんだ愛媛を離れて、時が経つのは早いものではや18年になります。今後は愛媛大学時代の諸先輩方のご指導により培った精神神経医学の診療・教育・研究に関するマインドを鹿児島の地でさらに発展させるよう尽力する所存です。コロナ禍のため、愛媛に出向くことができない状況が続いており、大変失礼しております。この場をお借りして愛媛大学同窓会の先生方へのご挨拶にかえさせていただきます。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



城戸 輝仁 (平成13年卒・23期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 放射線医学 教授)

このたび御縁をいただき、2020年4月1日より放射線医学講座の教授を拝命いたしました城戸輝仁と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。私は2001年に愛媛大学医学部を卒業後、愛媛大学放射線科に入局し、医学部附属病院と国立療養所愛媛病院(現在の愛媛医療センター)で研修を行いました。その後、愛媛大学大学院に入学し、前教授の望月輝一先生の御指導のもと、CTを用いた心筋血流量の定量評価アルゴリズムの開発に関する研究で学位を取得させて頂くとともに、この技術に関する国際特許取得や産学連携による商品開発を進め、広く臨床に活用できるシステムを構築して参りました。卒業後はボストンのマサチューセッツ総合病院に留学する機会を頂きCardiac MR/CT Imaging Centerのサニー・アップラ教授(現UT Southwestern病院)のラボでマルチモダリティを用いた心臓画像診断について学ぶ機会を頂きました。帰国後は愛媛大学放射線科で研究・教育・診療に従事するとともに、愛媛大学医学部に新設された先端医療創生センターTRCにも所属し、基礎と臨床の橋渡し研究や医工連携、産学連携の推進に貢献させて頂く機会を頂きました。これらの仕事を進めていくにあたって、愛媛大学の同窓会の皆様に数多くのご支援を頂きましたこと、心より感謝いたしております。

放射線医学は画像診断と放射線治療、Interventional Radiology (IVR) を三本柱として構成されており、広く病院診療を支える中央部門を担っています。私自身はこれまで画像診断を軸に努めて参りましたが、今後は教室の責任者として、放射線治療、IVRを含めた愛媛における放射線科診療全般の発展に貢献できる体制作りに努めたいと考えております。そのためには、放射線科医を志す若手医師の確保と育成が地方大学病院の重要な責務と考えており、愛媛の診療に貢献できる人材派遣が滞りなくできるよう教室一丸となって努めて参ります。

研究においても、世界トップレベルの研究設備が整った循環器イメージング研究を始め、画像診断、放射線治療、IVRの各領域におけるエキスパートがそろった体制を整え、愛媛から世界に発信できる研究を継続していきます。また近年では、AIを用いた画像認識技術が急激に発展して参りました。放射線科診療はAIとの親和性が非常に高く、愛媛大学放射線科でもこの新しい技術を積極的に活用するため、AI研究グループを立ち上げ、患者さんに優しい新たな画像診断法の開発に取り組んでいきたいと考えております。同窓生の皆様にはますますのご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



志水 太郎 (平成17年卒・27期生)

(獨協医科大学 総合診療医学 教授)

愛媛大学医学部同窓の先輩方、並びに同期・後輩の皆さん、大変ご無沙汰しています。平成17年卒業の志水太郎です。2年前の平成30年から、栃木県の獨協医科大学・総合診療医学講座主任教授を拝命しています。このたび同窓会より寄稿のご指示を賜り、僭越ながら筆を執らせていただいた次第です。自身は愛大を卒業後、初期臨床研修マッチングでアンマッチとなりつつも、研修を地元の東京・江東病院で開始致しました。研修の中で師（青木眞医師・感染症専門医）との出会いから総合診療を志し、全身を俯瞰的に診る訓練として大阪・市立堺病院総合内科で後期研修を過ごし、更に多様な臨床現場に対応するための武者修行を行うため国内の様々な急性期・慢性期の施設および米国でベッドサイドの研鑽を継続しました。同時に医師の知的基盤を固めるため、米国（エモリー大学）とオーストラリア（ボンド大学）で公衆衛生学（政策管理学）と経営学（戦略思考）をそれぞれ修めました。これらと並行して、総合診療の一つの軸である臨床教育の訓練を独自で行い、現在まで全国50以上の医学部や各地の教育病院でのベッドサイド教育、またカザフスタン共和国や米国などの国外での教育活動にも従事して参りました。ご縁があり平成25年に東京・練馬光が丘病院総合診療科の立ち上げに従事し、翌年米国マッチングの結果ハワイ大学内科勤務で米国の臨床に戻ったものの、身内の事情のため1年で日本に戻るようになりました。その矢先、平成27年に東京城東病院総合内科立ち上げを経て、平成28年より現在の職場で総合診療科を立ち上げるチャンスを頂き現在に至ります。総合診療は広範な診療・地域ニーズに応えることのできる若手の育成が全国的に始まったばかりです。さらに必要なことは同領域のリーダーの育成です。私の講座のミッションはまず、地域における臨床的貢献を継続的に行うことですが、教育面では総合診療における国内随一の拠点となって若手総合診療のリーダーを輩出し、研究面では独自の専門分野である診断戦略学で世界をリードしていこうと考えています（代表作：「診断戦略」(医学書院, 2014年) および関連国際論文等）。愛媛での6年間は多くの先生、先輩方、そしてかけがえのない同期に恵まれました。同期は皆頼もしく、今も強い親交があり、自分の勇気となっています。そして何より、現在の自身の臨床・教育・研究の地盤を涵養できたのは愛媛時代ならではの諸先生・先輩方のご指導があったからこそです。愛媛から離れた地ではございますが、愛大魂を忘れず、愛大に恩返しできるよう日々邁進してまいります。今後とも何卒、ご指導よろしくお願い申し上げます。

新任教授からのメッセージ



金川 基

(愛媛大学大学院医学系研究科 医化学・細胞生物学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、令和2年2月16日付で愛媛大学大学院医学系研究科医化学・細胞生物学講座（旧分子心血管生物・薬理学）の教授を拝命致しました金川基と申します。まず、本年、国内外に深刻な状況をもたらしています新型コロナウイルス感染症関連の対応にご尽力なされている同窓会会員の皆様、ならびにご関係の医療従事者の方々に深く敬意と感謝の意をお伝え申し上げます。

さて私は、平成13年に北海道大学大学院理学研究科化学専攻を修了し、同年から5年にわたりハワードヒューズ医学研究所/アイオワ大学に留学しました。その後、大阪大学大学院医学系研究科の戸田達史先生（現東京大学大学院医学系研究科・脳神経内科学教授）の教室に着任し、平成21年には、神戸大学大学院医学研究科に設置された基礎・臨床一体型の教室（脳神経内科学/分子脳科学分野）に異動し、教育と研究に従事してまいりました。この度、ご縁を賜り、前任者の堀内正嗣先生の後任として着任いたしました。

私は留学中に、生体にとって重要な翻訳後修飾のひとつである糖鎖の異常によって発症する筋ジストロフィーの発見に携わりました。その後、一貫して、疾患原因遺伝子の機能、糖鎖の構造と生理活性、疾患モデルを用いた病態・治療研究に従事してまいりました。多くの共同研究者の先生方にも恵まれ、発症に直結する糖鎖の全容を解明し、福山型筋ジストロフィーや類縁疾患の治療戦略を提唱するに至りました。今後は愛媛大学にて、筋ジストロフィーのトランスレーショナルリサーチを推進する一方で、研究の幅を広げるべく、先端技術を取り入れながら様々な疾患のモデル系を樹立させ、得られた成果を臨床に応用できるような病態生理研究に着手したいと考えています。

講座の運営に関しましては、医療の現場で感じた疑問を科学的に解決し臨床に還元できる研究医の育成を理念として掲げ、しっかりとした基礎力とリサーチマインドを習得できる研究室を目指します。疾患を分子のレベルで理解する論理的・科学的思考力を身に着けることが、基礎研究者にとっても臨床医にとっても重要と考えております。そのため、臨床系の先生方のご指導を仰ぎつつ、基礎臨床融合の体制を構築し、テーマ等問わず広く人材を求めていきたいと思っております。研究には苦勞が伴いますが、困難でチャレンジングな研究を最後まで成し遂げることが、世界に通用する人材として次のステップへと踏み出すことにつながると信じています。私たちとともに学び、そして、世界に羽ばたく研究医・研究者が愛媛大学から巣立つことを切に願っています。

もとより浅学非才の身ではありますが、これまで以上に教育・研究に精進し、愛媛大学医学部・医学系研究科の発展に貢献すべく努力する所存です。何卒ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



野上 尚之

(愛媛大学大学院医学系研究科 地域胸部疾患治療学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、令和2年4月1日より愛媛大学大学院医学系研究科地域胸部疾患治療学講座の教授を拝命いたしました野上尚之と申します。由緒ある同窓会の末席に加えていただき心より感謝申し上げます。私は平成5年に三重大学医学部を卒業し、同年岡山大学医学部第二内科に入局しました。学位を取得後、平成13年より国立病院機構四国がんセンターに着任し、数多くの開発治験や多施設共同研究に携わり、肺癌診療における新規治療の確立を図るとともに肺がん診療ガイドラインの委員として標準治療の普及にも努めてまいりました。

このたび今治市医師会と山口修教授、そして同窓会の先生方のご支援を賜り、地域胸部疾患治療学講座を開講する機会を頂きました。先生方のご厚情に重ねてここに深く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

愛媛大学で私が行うべきことは、以下の3つと考えています。

- 良性呼吸器疾患や、専門の胸部悪性腫瘍について、診断から治療、緩和ケアまでを、サテライト施設である今治の地で完結するシステムを作る
- 上記の呼吸器疾患治療の連携システムが他の地域医療のモデルとなり、将来的に愛媛全体で展開し呼吸器診療の向上をはかる
- 中四国で最も呼吸器内科医が少ない愛媛で、次世代の若い呼吸器医を増やす。そのために、若い医師や学生に呼吸器内科の魅力（特に私は自分の専門の肺癌領域における10年程の劇的な進歩について）を伝える

と考えています。山口教授のご厚意により、サテライトの済生会今治病院に優秀な同僚を派遣して頂きソフト面でも充実、もはや四国がんセンターで出来ることで愛媛大学はもちろん済生会今治病院でも出来ないことは何一つない、と自負しています。

愛媛大学呼吸器内科では、今年度から新規抗がん剤の開発治験にも参画しています。これにより数年先のガイドラインを変えるような医療を若い先生方に見てほしい、一緒に3～5年先の未来の治療法を築くワクワク感を感じてほしい、昔のつらいイメージしかない肺癌治療が大きく変わっていく姿と一緒に見てほしい、と考えています。

治療が進歩し慢性疾患となったともいえる『がん』は高齢者の疾患です。合併症を数多く持つ高齢者のがん治療は、もはやがんセンターのような特殊な施設ではなく、合併症治療においても副作用対策においても総合病院が中心になる時期が来ています。同僚達と共に愛媛の呼吸器診療の『最後の砦』として貢献できるよう精進していく所存です。今後とも、どうぞご指導・ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



木村 映善

(愛媛大学大学院医学系研究科 医療情報学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、令和2年5月1日より、愛媛大学大学院医学系研究科医療情報学講座の教授と医療情報部部長を拝命いたしました、木村映善と申します。私は大阪生まれですが、幼稚園時代から高校まで宇和町、伊予市、松山市で生活しておりましたので、ほぼ愛媛県人であり、ホームに戻ったような安堵感と重大な責任のある立場に立ったという緊張感がない交ぜになった心境であります。

北海道大学医学部在学中に医療情報学の存在を知りました。医薬品、医療機器、遺伝子に続いて医療情報が次世代医療に貢献する時代が来ると目を輝せながら解説する櫻井恒太郎教授の姿に、当時情報工学にも関心を持っていた私は、医学と情報工学の複合領域である医療情報学での研究がしてみたいと思ったものでした。そんなおり、私が大学を卒業する年に石原謙前教授が愛媛大学で医療情報学講座を開講される予定で、大学院生を募集されているという奇縁に恵まれました。医療情報学という学問は日本ではまだ歴史が浅く、全国的には東京大学の開原成允先生を嚆矢として私の世代の研究者で大体三代目となりますし、愛媛大学の医療情報学講座としては二代目となります。

医療情報学という学問を一言で表現するならば、「医療における兵站学(Logistics)」です。兵站とは、前線の活動を維持・促進するための資源の補給や連絡を確保し、独立した活動ができるようにするものです。つまり、医療における人的資源、物的資源、情報資源を必要な場所・人・時に最善の状態を提供する方法論の学問となります。そして、愛媛大学医学部においては、医療情報学講座と附属病院の医療情報部は統合されておりますので、医療情報学の研究を背景としつつ診療を支援する医療情報システムの運用管理にはじまり、またそのデータを活用する地域医療連携システム、疫学研究、医療安全まで多岐に渡ったサポートをさせて頂くこととなります。

他の所では研究のためのデータ基盤と診療連携の情報基盤は担当者が異なるため、別個に運用されがちです。愛媛大学におきましては、先生方の一体感を強く感じておりますし、臨床・研究・地域医療連携・医療安全に求められる情報基盤をうまく統合していき、広く活用頂けるような環境を創り上げていきたいと考えております。愛媛大学のみならずにおきましては、どうぞ力添えの程お願い申し上げます。



当たり前のこと

沖 貞明 (昭和56年卒・3期生)

(県立広島大学 保健福祉学部 理学療法学科 教授)

卒業後は愛媛大学整形外科に入局し、2000年より現職に就いております。当大学は広島県三原市にあり、看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・社会福祉士・精神保健福祉士を養成しています。厚生労働省の平成30年の医師調査によると、私の職種は「医育機関以外の教育機関又は研究機関の勤務者」に分類され、全医師の0.5%であり、医師の働き方としては少数派です。

学生教育と研究が主な仕事ですが、大学附属の診療所と三原市内にある興生総合病院での診療も続けています。大学附属の診療所には18期生の耳鼻咽喉科医師、興生総合病院には整形外科に8期生、30期生、35期生、38期生（ご両親は3期生の同級生）、外科に9期生、耳鼻咽喉科に18期生と非常に多くの同窓生がおられ、頼もしい限りです。

医療従事者養成の大学に勤務していることもあり、医師だけで医療はできないという、当たり前のことを書かせていただこうと思います。

愛媛大学附属病院に勤務していた頃の話です。電子カルテがない時代でしたので、担当患者の朝の回診前にはナースステーションで看護記録を読んでおりました。不安で寝られなかったとか、リハビリの後が痛かったとかいろいろ有益な情報が満載です。ある日、看護師に、看護記録があるので助かると言ったところ、「先生のために書いているのではない」と叱られました。その後、看護師の業務は診療の補助と看護と知りました。看護記録は、良い看護をするため、自分達のために書いていたわけです。医師は、24時間にわたって患者をみておくことはできません。看護師が交代で24時間看護することによって、初めて医師が医療を行うことができるのです。医療の現場では医師のできない業務をする職種があり、その職種と協力することで医師としての医療ができるのだと理解できるようになった最初のエピソードです。

松山赤十字病院では、リハビリテーション科の診療に携わりました。リハビリテーション科の医師の主な仕事は、患者を評価して理学療法士・作業療法士・言語聴覚士にリハビリテーションの処方を行うことです。各療法士は、処方がないのにリハビリテーションを行えば違法となります。薬と同じ、処方という言葉を使います。皆さんも薬剤師に薬の処方をされるとと思いますが、処方箋に「薬をお願いします」とは書きませんね。同様に、「リハビリテーションをお願いします」とは書きません。薬剤・使用方法を具体的に書くのと同様に、どのような訓練をどの頻度で行うか具体的に書きます。各療法士は、処方を出す医師よりも長時間にわたり患者に接しますので、医師よりも豊富な情報を得る立場にいます。情報が少ない医師が情報の豊富な療法士に処方をだすという困難な状況が発生します。これを克服するためには、カンファレンスなどの情報共有が必要です。各療法士と上下関係ではなく、対等な関係を築く努力をしなければ必要な情報も入ってきません。処方する立場というだけで偉そうにしている医師は、療法士にとって鼻持ちならない存在でしょう。

このような経験をするまでは、医師さえいれば医療は行え、他の職種は医師の命令に従えばいいと思っていました。卒業したとたん、何もできないのに先生と持ち上げられ、医師不足の病院にいくとさらに持ち上げられ、いつの間にか傲慢な気分・態度になっていたように思います。医師は医療従事者の一人に過ぎず、他の医療従事者の助けによって初めて医療を完遂できるのです。医療に携わる各職種がプロとしてベストを尽くし、お互いの職種に敬意を払うべきなのだと思います。



探求移民

長井 俊治 (平成10年卒・20期生)

(在エチオピア日本大使館 医務官)

アフリカの風土病研究がしたくて、郷里の愛媛を出て熱研の門を叩き長崎で研修しました。2年目に出遭った16歳のEwing肉腫症例が進路を変え、上京後10年Hematology/Oncologyに専念するも仕事と家庭の両立に苦しみ、決意して大使館勤務の医務官に転向しました。

初任地チュニジアで愛大1期生の大先輩・伊東久雄先生にバトンを受けた医務官生活も今年で9年目です。医務官の本分は大使館員の健康管理にありますが、(そちらは同級生の妻と共に程々に)そこに住み土地の病気を知ることが何よりの醍醐味です。チュニジアでは同族婚を背景にした家族性乾癬を、ルワンダでは若者胃がんが多発する疫学を、エチオピアでは結核、コレラ、ハンセン病と、教科書でしか見たことない病を前に胸躍らせています。戻らない(戻れない)と思っていた母校に2年前、マラリア研究の話を知りたくて寄生虫学講座の鳥居先生を訪ねました。実に19年ぶりでしたがその無礼も快く迎えて下さり「時には骨休めにでも寄りなさい」と頂いた時はこみ上げるものがありました。不思議とその後、先輩方とご縁が増えました。がんで世界した母の腸を繋いでくださった古手川先生、看取ってくださった坪田先生、いつも力をくださる山岡先生。感謝させてもらえる先輩方の存在を今は何よりありがたく感じます。

5年前、ルワンダでたった1人のoncologistと一緒に働いた経験がきっかけで、日本の同僚や先輩の力も借り「若者胃がんの謎」に取り組みました。深入りするといつもガイジンの壁が立ち上がり、現地人との協業なしにこの壁は越えられないと、若手を日本へ送り出すことにしました。今やっとその第一陣が祖国へ戻り始めました。10カ年計画。気の長い話ですが、自分だけで出来る仕事を一気に片付ける喜びとは違った感慨があります。同じ時代、同じ地球上にいながら大きなgapのある世界を往来することで謎解きできることがある気がしています。

日本が恋しくない訳じゃありません。日本ならこんな苦労しないで済むと思う事は山ほどありますが、体が自然とこちらへ動きます。一度きりの人生なら故郷は遠きにありて想うもの、僕は探求移民でありたい。20年の遠回りを経てようやくスタートラインです。そろそろこの地に腰おろし、風土病研究で日本と世界と繋ぎ、病に苦しむ若者たちの希望になるような仕事がしたいと思います。それが今まで僕を頼ってくれた多くの患者さんと、郷里・母校への恩返しになればこの上ない幸せです。





最前線で COVID-19 と闘う

白野 倫徳 (平成14年卒・24期生)
(大阪市立総合医療センター 感染症内科 医長)

平成14年卒業の白野倫徳と申します。

私は大阪府における感染症診療の中核を担う、大阪市立総合医療センター感染症内科に勤務しております。2020年の正月休み中、中国・武漢市で原因不明の肺炎患者が多数発生しているというニュースを、不安な気持ちで見えておりました。やがて日本に入ってくることを予感し、正月休み明けには暫定的な対応マニュアルを作成し、当院での受け入れ態勢を整えました。まもなくその肺炎は新型コロナウイルスによるものと判明しました。実際、大阪府初となった患者を受け入れたのは1月23日でした。それから患者は増え続け、3月下旬からは中等症・重症患者に特化するようになり、8月末時点で100人以上の診療にあたりました。

3月からは大阪府専門家会議のメンバーに選出いただき、吉村大阪府知事や松井大阪市長との意見交換や、メディア出演の機会もいただきました。経済を回すことを考える知事と、疲弊する医療現場とは意見が対立することもありました。しかしよく現場の声を聞いていただき、最終的には「政治家が責任を取ります。」の言葉を信じて落としどころを見つけられました。大阪府の感染症対策に関わったことは大変貴重な経験でした。

そんな私は学生時代は落ちこぼれで、留年も経験しました。当時、寄生虫学講座の鳥居本美教授と坪井敬文准教授にお声かけいただき、マラリアの研究に携わる機会をいただきました。タイのマラリア流行地でのフィールドトリップにも参加し、貴重な時間を過ごしました。この経験が感染症診療に興味をもった原点でもあり、医師になってからも病院や地域で感染症診療を行いつつ、タイのマヒドン大学に留学し熱帯医学を学びました。また、ケニアの奥地の村での医療ボランティアにも継続して参加しています。

私は学生時代には空手道部に所属していましたが、そこで鍛えた身体、培った精神は、今の活動にも生かされています。また、保健医療研究会という地域医療を学ぶサークルにも所属していました。地域の患者さんから学ぶことを目的に、農村地域でのフィールドワークに参加したりしました。現在は都市部での勤務ですが、地域目線で考える原点は愛大時代に学んだものと思っております。そしていかなる時も、愛大でつながった人脈は大切な財産となっています。

ほんの1年前には、世界がこのような事態になっているとは、まったく想像できませんでした。卒業生や在学生の皆さまも、かつてない状況の中、苦労されながら業務や勉学に取り組んでおられるのではないかと拝察いたします。皆さまがこのコロナ禍を乗り越え、益々活躍されることを祈念しております。



坪井 敬文 (2期生)

(愛媛大学プロテオサイエンスセンター マラリア研究部門 教授)

グローバルな健康社会の実現を目指して

1974年に愛媛大学医学部に入学以来、退職までの48年間様々な転機を経験してきました。エピソードをいくつかご紹介して、定年に際し同窓会員の皆様へのメッセージとさせていただきます。

<医学生～研修医>

私は、医学部創設来のスローガンであった「地域医療」を目指し、保健医療研究会でフィールドに出かけ、軟式テニス部で体力を養い、1年半の大病院での内科研修とその後半の診療所勤務の経験を重ね「地域医療」まっしぐらでした。

<第1の転機：寄生虫学へ>

卒後3年目に縁あって母校で寄生虫学の基礎研究者を目指すことにし、当初はサナダムシや肺吸虫をテーマに寄生虫の基礎研究をしました。思い返せば、1977年学部4年生の最初の皮膚科外来実習で診た南予の患者さんは、片足が大きく腫れ上がった象皮病（フィラリア症の後遺症）でした。その後担当した寄生虫学実習で、当時のフィラリア検査の血液標本を見ることができました。その時判ったことですが、1961年までの3年間の集団検診により愛媛県三崎町でフィラリア症が撲滅され、これが包括的なフィラリア症対策の世界初の事例でした。現在では、大村智先生が開発したイベルメクチンが世界のフィラリア症撲滅に大きく貢献していることは、寄生虫学者として感慨深いものです。

<第2の転機：マラリア研究へ>

1991年頃、国内の寄生虫症例が激減する中、グローバルな視点から研究テーマをマラリアに変えました。しかしマラリア研究は、米国NIHを中心に欧米諸国で厳しい競争が繰り広げられていました。同門の鳥居先生と私は、当時研究者人口が少なかった媒介蚊の中で効くマラリアワクチン、というニッチを狙うことにしました。しかしこの時はプレゲノム時代のため、ワクチン候補遺伝子のクローン化すら容易ではありません。なんとかワクチン候補遺伝子を見つけても、ワクチン研究に必須の「組換えタンパク質合成」という次なる壁に直面しました。

<第3の転機：コムギ無細胞タンパク質合成法へ>

2002年にマラリアゲノムが解読されましたが、大腸菌等の当時の技術ではマラリア組換えタンパク質をつくることは非常に難しく、マラリアワクチン研究は世界的に停滞していました。その頃、愛媛大学でコムギ無細胞法という新しいタンパク質合成技術が開発されました。開発者の遠藤弥重太先生との偶然の出会いをきっかけに、2003年からこの技術を用いたところ、マラリアタンパク質を自由自在に作ることができました。これが現在の自身のマラリア研究の基盤となっているだけでなく、私達のマラリアタンパク質が評価され、マラリア流行地も含めた世界中の研究者との共同研究ネットワーク拡大の基盤となっています。

以上、「マラリア」、「コムギ無細胞法」、「国際的共同研究者」等々、数多くの「出会い」がありました。それを大切に育むことによって、愛媛のマラリア研究がワクチンの臨床試験をも視野に入れて発展していることは疑いありません。マラリアを地球上から無くすために、これまでに築いてきた研究基盤はもちろん、幅広い「出会い」を次世代の研究者にバトンタッチしたいと思います。今まで、同窓会員の皆様お世話になりました。



松田 正司 (2期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 解剖学・発生学 教授)

大学生活48年のよもやま噺

大学50周年：二期生として昭和49年に入学、48年間を愛媛大学で過ごしました。大学も50周年を迎えようとしています。法人化等の大きな変化も有ったが、概ね愛媛大学は健全な成長を続けていると見えます。卒業生が学外でも教授に就任しており、学内でもその数は増加しました。

学生は伸び伸びと勉学や部活に打ち込んでおり、国試合格率もまずまずで、西医体では常に上位に入り、優勝もしました。留年が隣近大学では最も少なく、「やる気の有る新入生を入学させ、熱心に指導して育てている」という正の評価が可能でしょう。各教員の熱意には敬服します。

学生教育、研究：教授になってすぐに学生生活委員長として学生の生活指導を10年以上行いました。本学でも6年間学生支援センター長を務めました。新入生の歓迎会、一泊研修に始まり、解剖実習で長時間顔を合わせていると問題の有る学生が見えて来ます。成績下部U20の教育が実績を上げていますが、さらに経済的困窮、精神的疲弊している一部の学生に手を差し伸べる大学、同窓会であって欲しいと願います。研究は、神経成長因子、二分脊椎の研究を続け、科研費はほぼ継続的に取得出来ましたが、同期生の寄付が本当に有り難かったです。講座では、個々の研究者が自分の領域で自由に研究を行い、5名以上の当講座出身教授が全国で活躍しています。

手術手技研修：愛媛大学は手術手技研修が盛んで、外科系全科に加え、第一、二、三内科まで参加して、参加講座数、参加人数で全国トップクラスです。厚生労働省の予算を初年度から連続して9年連続で支援を受けているのは愛媛大学のみです。昨年は厚生労働省からの基盤設備費も獲得出来ました。各科とも非常に熱心で、規模や内容は千差万別ですが、特に若い参加者の熱意にはいつも圧倒されます。高田清式先生のご尽力で愛媛の研修医が増加しましたが、敬遠されがちな外科系への県内入局が手術手技研修の開始後には増えています。各科の卒前教育に利用されている成果でしょう。何より、医学部内に、科の枠を超えて手術手技研修センターを盛り立てて行くこととする機運があることが嬉しい。

武道探求：学生時代に城北の本学キャンパスにおいて10年間合気道修行を続けて3段、48年の稽古で6段を取得し、棟田道場等の道場長を務めています。愛媛県合気道連盟では理事長を経て、本年から会長となりました。東中南予の10名以上の道場長の多くは年上ですが大学人とは違った意味で魅力的な人物が多い。学生時代から始めた合気道杖術を極めようと松山東署等で杖道を修行し4段を取得。全国大会にも県代表として出場したが、試合中に右手神経を損傷し、杖道修行は中断、合気道に専念中。現在も週3回の道場稽古以外に1時間は自宅稽古を行う日々。禅と共に定年後の探求の楽しみの1つです。座右の銘は「愛語回天の力有り」。

50周年に向けて、3期生雄志座談会

<薬師神>

今年の医学部同窓会誌に載せる「3期生雄志の座談会」を始めます。まず簡単に自己紹介をお願いします。



<高田>

高田清式(たかだきよのり)、大阪出身です。高校卒業後、早稲田大学に2年通っていたので、3期生ですが年齢は2歳上になります。学生時代では、最初の2年間の医進課程は空手に打ちこみ、医学部で学び始めてからは、クラスのまとめ役みたいなことをしたり、4年生は自治会の会長をしたりしていました。学生時代の思い出というと、福利会館(現・職員福利棟)で、実習が終わるたびに毎回宴会していたことですね。卒業後は第一内科を専攻しました。大学院で研鑽を積み、附属病院に出たり入ったりしながら、診療所、松山赤十字病院、県立今治病院で勤めました。附属病院の病棟長も経験し、今は研修センターを経て地域医療支援センターで若い医療人の育成を行っています。



愛媛大学医学部附属病院
地域医療支援センター長
高田 清式



愛媛大学大学院医学系研究科
小児科学 楠目 和代

<楠目>

楠目和代(くずめかずよ/旧姓・原)、岡山出身です。夫も同じ3期生、子どもは3人産んで、1人亡くしました。卒業後は愛媛大学小児科に入局しましたが、研修医1年目で結婚、2年目で出産し、大学を離れました。その後、国立療養所愛媛病院小児科で10年間、重症気管支喘息を中心として小児慢性疾患の診療に従事しました。1993年、夫の留学2年目に家族で渡米。帰国後 NTT 西日本松山病院で「一人部長」として新生児診療他に従事したのち、2001年再度渡米。2004年に帰国後愛媛大学小児科に再入局しました。そこから、小児アレルギー・グループを立ち上げ、横山先生(当時の病院長)のお声かけて女性医師部会を始動。マドンナプログラム作成にも関与しました。その後、県立新居浜病院で6年間、愛媛大学地域救急医療学講座に5年間勤務。今は新居浜病院と附属病院でアレルギー診療をしています。

<薬師神>

ありがとうございます。充実した人生という感じですね。重松先生、お願いします。

<重松>

重松裕二(しげまつゆうじ)、松山出身です。大学時代の一番の思い出はサッカー部で活躍したことです。全国大学体育大会が松本で行われた年に、たしか全国3位になったのが思い出になっています。学業の面ではそれほどだったと思いますが、卒業後は第2内科の国府教授のもとで循環器を専攻しました。入局したときに国府先生が高血圧だったのであまり直接の指導はなく濱田先生がいらっしゃったので、「循環器をやらせてください」とお願いして循環器の仕事で大学でしていました。その後看護学科に移動し、教鞭をとっています。医師とはまた異なる立場の看護師さんへの教育もなかなか大変で、結構苦労しています。



愛媛大学大学院医学系研究科
基盤・実践看護学教授
重松 裕二

<土手>

土手健太郎(どてけんたろう)、広島県の大竹市出身です。学生時代の勉強は、前から二列目に座った重松君の勉強しているのを見ながら、端に座ってうとうと寝ていた自分を思い出します。実習をさぼることも結構あって、自由な、本当にいい時代だったな、と思います。麻酔科を選んだのもあまり勉強しなくてよさそうだし、2年後に他の臨床科に替わってもいいかなと、決断を先延ばしにし、入局しました。でも、麻酔に慣れてきて、適当にさぼったりしても、同級生がかばってくれ、上級医の先生も心配してくれ、すごくアットホームで居心地がよくて、そのままずっと居ついてしまいました。県病院や市民病院などで経験を積み、ICUを専門にし、約28年間附属病院のICUに勤めました。附属病院の2号館を作るときには、ICUも目玉の一つということで、事務方や教授陣とも徹底的に議論して(忙しく楽しい時間でした)、最終的にはまああのICUできたと自負しています。昨年9月に愛媛県立中央病院に移りました。



愛媛県立中央病院
麻酔科部長 土手健太郎

<松岡>

松岡純弘(まつおかよしひろ)です。土手先生と同じ広島出身ですが、高校は違います。卒業するときは外科系のどの分野に進むか悩んだのですが、中学校から大学までずっとサッカーをしていて、

スポーツ医学をしたいということで、整形外科を選んで入局し、大学院にも入りました。4年間の大学院時代は、昼間ほとんど実験室に居て、夜は当直業務という状態でした。大学院修了後は、広島県三原市の365日24時間体制の救急病院に行きました。

その後1991年に、35歳で松山・太山寺町で開業しました。当初は有床診療所としてもしていたのですが、回復期病棟の開始で入院患者数も減ったので、無床の診療所へと変更しました。29年間続けた開業医ですが、外来の減少や人件費がかさんだこともあり、整形の後輩に今年(2020年)の1月末で譲りました。2~3ヵ月は遊ぼうかと思っていたのですが、2月から松山リハビリテーション病院の非常勤になり、4月から常勤です。忙しいですが、土日休みなのがいいですね。



松山リハビリテーション病院
リハビリテーション科
松岡 純弘

<薬師神>

具体的な話に入っていきます。まず、3期生の当時の雰囲気やカラー、印象に残っている先生方のことをお聞かせください。

<楠目>

高田先生のイメージがそのまま3期生という感じで、楽しく仲良く、勉強もまあまあしていましたね。1・2期生は賢い方がいらっしやったんですね。試験にしても、過去問というものが無いので、すごく大変だったと思います。



<薬師神>

3期生は「和気あいあい」。よく言われるのは、1期生というのは、ものすごくまじめで優秀な人だったというのがあって。でも、あまり愛媛には残らずに散らばってしまった。2期生も優秀で、今の状況でも結構報われている人が多い。不思議な、1期生と2期生の関係。3期生はその次に出てきた。

<楠目>

3期生になると、過去問だって2年分あるわけだから、そこそこやっていたら普通に上げられる。学年全体で仲良くやっていたし。教授の先生方も、みなさんキャラクターが素敵。

<高田>

学年の雰囲気としては、必死で勉強していたというよりも、余力を持ってやっていて、必死ではないという感じです。よく遊びよく学ぶという感じで、必死で試験に通らないといけないという感じではなく、試験前に慌ててやる。

<楠目>

追試が当たり前で、受けることをあんまり気にしてなかったですよ。今だと落とさないように試験問題作ることあるのかもしれないですけど、当時はそんなことなく試験に落とされて、でもそこそこ書いていたから、追試で通してもらえた感じでした。あと、実習が終わったら必ずコンパをして、振り返っていました。



<土手>

大体、音頭取りをやりました。各医局からお酒を集めて回ったり。

<高田>

福利会館を使わせてもらえたから、会費1000円くらいで飲めたんですね。

<楠目>

後片づけさえすれば、大学の中で飲み会ができた時代だった。



<重松>

先生たちも呼んで、一緒になってやりましたね。そうやって、一緒になってワイワイやってくれる先生たちばかりでした。家に直接招いてくれる先生もいたりして。

<楠目>

だから、学生のとときはまだ先生を怖いなんて思ったことなかった。

<高田>

でもさ、僕らくらいまでだと思うけど、初代学部長、当時の須田学部長が、生化学の授業で説教されたでしょう。

<土手>

されたなあ。「勉強しないのならうどん屋の丁稚になれ」って僕たちに言うんじゃない(笑)。

<高田>

初代の学部長に説教されたのはこの世代までだと思う。

<土手>

なんや、変わった先生やなあって思ってたけど。やっぱり『分子生物学の日本の黎明』とか読むと、やっぱり名前が出てくる。



初代医学部長 須田正己先生

諸君は素晴らしい天職へ向って旅立とうとしています。まづ一割打者になって下さい。それは或る分野で秀でた専門家になる事です。次に三割打者になって下さい。それは医学の山に分け入り、迷子にならず山を見通す様になる事です。最後に目指すものは、自己犠牲を散らして意に介しない医師の生き甲斐を手造りで体得する事です。以上は素晴らしい天職へ到達するすし道であります。

<高田>

やっぱり須田先生は偉い。

<薬師神>

名物教授というと、昨年93歳で亡くなられた野島先生がいらっしゃいますよね。

<松岡>

学部時代は、変わった先生だという印象もありましたが、あまり厳しい感じではなかったんですよね。ただ最後の締めはきちっとする先生だった。

<楠目>

女子学生には人気があったと記憶してますね。

<高田>

野島先生は当時学生生活委員会の委員長だったんですよ。医学祭が今、春に開催されているのは、野島先生と相談して変えたからなんです。医学祭は1期生から一応始めてはいたんですけど、11月なんて時期にはほとんど来なかったんですよ。それで僕が自治会の会長のときに、「11月頃っていうのは寒くて誰も外で露店なんてできない、1年生が喜ぶから5月に変えてくれ」というと、野島先生が書類書いてくれて教授会に通して、それで第5回くらいから変わったんです。

<楠目>

いい先生でした。私はすごく好きだったんですよ。

<高田>

きちっとされてる先生でした。

<松岡>

3期生が医学部で授業を始めた頃から、医学部のサークルも増えていったと思います。私も、医進課程(教養課程)の2年間は本学のサッカー部でプレーしていましたが、3年生の時に重松くんたちと一緒に医学部のサッカー部を正式に発足させました。最初は本学と兼任でしたけど、その頃に全国大会に出たんですよ。

<重松>

中四国の大会でまず優勝したんじゃないかったですか。それから、久留米の大会でもベスト4になって、それが全国大学体育大会の出場資格で。それで松本の大会で全国3位になりましたね。

《サッカー部優勝祝賀会》



昭和52年6月20日 福利会館にて

<松岡>

ちょっとした自慢だと思っています。でも、今は学生も忙しいのか余裕がないのか、医学部の学生は医学部のサークルにしか入れなくなっていますよね。本学のサークルに入ってプレーしたり、活動したりという学生が少なくなっている。

<重松>

昔も無茶をした学生はたくさんいましたけど、やはり今とは時代というか、世間の見る目が違ってしています。それでも、学生の本分というのは、医師になるために勉強して卒業することだと考えて、そういう意識は必要かな、とは思っています。

<薬師神>

学生の話が出ましたので、自分たちと比べていかがですか。要望などもあればぜひ。

<土手>

僕は、大学でもいろいろ講義をさせてもらったけど、自分自身は、麻酔の講義って、横田先生の1時間と、新井先生の最初の1時間に出たきり。すべてさぼってたんですね。それで、「麻酔科の講義をしろ」と言われてもできないんです。そこで学生に麻酔科の新井先生の講義ノートのコピーをもらって、一生懸命勉強して講義をしました。今の学生は、麻酔科一つにしても覚えることがいっぱいありますよ。僕らの頃は循環器内科だってエコーはなかったし、放射線科なんて最たるもので、CTがあるかないかの頃だったけど、今はそれぞれの科がものすごく進化しています。それらをいちいちフォローしないといけないので、やはり並大抵ではない努力が必要になって、授業にも出席せざるを得ない。多方面に深い知識がいるようになって大変気の毒だと思います。気の毒なうえに、さっき言われたように医学生に対する世間の目がすごくシビアになっています。だから、僕はもうとにかく学生は全部褒めています。点数が悪くても「伸びしろがあるね」と言って、努力してもうまくいかないときは、「引き出しの入れ方が違っていただけだね」という風に。じゃないと伸びない子が多いんじゃないかな。

<重松>

卒業までの状況を見ていますが、我々の頃と比べて、今の学生さんは、大学を通過点という感じで考えているんじゃないでしょうか。我々の時代は、ここで医師になって、ここでやっていこうという思いがあって、まだまだ3期生で卒業した人も少ないし、この大学が母校という感じが強かった時代かなと思いますね。今の学生さんは、母校がどうこうという感じではなく、ただ通過点で、次はどこかに行つてという感じで「愛媛(愛)」とかそういう意識をあまり持っていないような感じがあります。

<松岡>

今思い出したんだけど、入学した当時は附属病院もまだなくて、埋め立て地の広いところに医学部の建物が半分くらいしかできてなくて、時が経つごとに医学部や附属病院の形ができていく、そういう過程を見ているから、母校愛が強いのだと思いますね。

<薬師神>

今は、優秀な学生ほどいろんな有名病院とか県外の病院に出て行って修行をしたいという野心を持っているとも言われますが、どうでしょうか。

<楠目>

私は、2004年から大学で働いているので、最近の学生さんしか知らないんですけど。すごくみんな勉強しているし、はじめによくやっているし、研修医とかもすごく頑張ろうという気持ちがあるんじゃないかな。私たちのときは、大学ではほったらかしで結構好きに遊んでいて、卒業してからはもう目の前の患者さんのためにいろいろ勉強をせざるを得ない、という状況でしたけど、今は学生の間にごく勉強させられて、研修医でも一生懸命勉強させられて、だから疲れてしまう、余力がないのではないかと。全然違うことをやって、考え直す時間を作ってあげられないのかなとか考えたり、母親でもあるので、頑張っている分かわいそうと思ってしまいます。

<薬師神>

そのあたり、高田先生はどうですか。

<高田>

結局ね、僕らのころは医学の分野って覚える量が少なかったんですよ。やっぱり覚えこむ量がどんどん増えてきているということはありますよね。僕らの頃は2年間医進課程(教養課程)で、4年間しか専門がなかったのに、それでも十分に余裕があったと思いますよ。今は専門を学ぶ期間が4年半くらいあるけど、覚える量、勉強する量も増えて、実習の量も1.5倍くらいに増えている。遊ぶ時間が少ないというか、ゆとりのある時間が少なくなったというのはあると思います。それが少し気の毒だなと思うけど、それを上手に使うって、エンジョイしてもらおうということも期待してはいるわけですが。

<楠目>

臨床を始めて思ったのですが小児科をしていると耳鼻科のことが気になったりして。そういう時に、他科に行ける期間やシステムがあればいいと思いますよね。大学院だと必ず研究しないといけない期間がありますよね。日本人は祝日とかって言われないと休めないの、そういうふうに決めておいてあげると、そのあとの余裕が生まれるんじゃないですか。

<高田>

学生時代は無理じゃない。国家試験受かるまでは難しいし、それをすると7年、8年とやらないといけないでしょう。

<楠目>

それも選択肢の一つではないでしょうか。勉強は必要ですけど、学会発表のスライドを作ったりすることが、本当にしないといけないことなのか、と思うことはたくさんありますよ。

<土手>

研修医になってからも余裕はないですね。僕みたいに、さぼろうともしないんですよ。

<薬師神>

そろそろまとめに入っていきます。大学や同窓会に対する要望などありますか。

<楠目>

今は、愛媛に学生は残らないんですか。

<高田>

愛大の卒業生は県内に6割残ります。地方大学ではいい方ですよ。

<土手>

高田先生がいるから残ってくれているのです。

<高田>

要は、3年目に80人以上も県内に残るのは地方の大学ではすごいことなんですよ。

<薬師神>

医師が残るとい側面では恵まれている大学だと思います。

<土手>

研修で愛媛に残ってくれる人が多くて、3年目の初期研修後も多いというのは、高田先生と事務の前川さんが、一人一人の研修医や、卒業間近の学生を丁寧にカバーしてくれているからですよ。おかげで、今までずっと継続してある程度の人数が残っている。これは本気でそう思っています。

<楠目>

では、3年目から後を皆さんにお願いしたいですね。

<高田>

結局、卒業してから、愛媛県内外で活躍するにあたって、そういう人たちのネットワークを作らないといけないのと、そろそろ松岡先生のように、後輩に病院を譲りたい人も出ているので、先輩と後輩の連携が大事だと思いますよ。

<楠目>

開業医さんだと居なくならないですよ。勤務医は、医局の都合とか、その場に居たくても結局居なくなってしまう。開業医さんは愛媛に必ず残ってくれる。地域医療では、開業医も大事なので、開業医をもう少し整備するように大学がバックアップしないと医師は増えない。それを同窓会でもう少しバックアップできればいいんじゃないでしょうか。

<高田>

少なくとも、お互いの情報交換があればいいと思っていただけだね。いずれ開業したい人もいれば、病院に残りたいという人もいる。そういう人がある程度、お互いに情報交換できる場があればいいと思う。同窓会でそれができればいいし、愛媛県の中で活躍している先輩・後輩の同窓会という風になったらいい。愛媛大学に限らなくて、愛媛県にいる医師全部とかね。

<薬師神>

確かに窓口の役割は大事ですね。

<高田>

同窓会が窓口になってもらう。直接言いにくかったら学年代表に言うとか、各学年にそれぞれ窓口とか相談できるような役割の人がいて、何かあったときそこに連絡を取れば、そこから同窓会に情報が伝わるくらいのネットワークは作ってもいいかとは考えています。最近、新臨床研修制度が始まってから特に勤務医も開業医も学年がバラバラの状態なので困っているんですね。個人情報ということもあって、お互いのことを知らせることが難しくもなっていますから。

<薬師神>

最近の学生は仲間意識も少なくなってきたので、なにか同窓生を引き留めていくシステムが必要でしょうね。50周年についてはいかがですか。

<松岡>

「学年ごと」と「全体と」という、分科会みたいな感じでイベントをやってもいいと思いますよ。何かないと、ただ50周年というだけでは集まってはこないと思う。

<高田>

同窓会としてやるべきこととして、僕はやっぱり、学生教育への貢献だと思うので、設備の充実を図るようなこととか、学生教育に対するサポートが必要だと思います。

<土手>

やっぱり50周年には何か、形に残るものがあるといいですけどね。

<薬師神>

ちょっとまとまりが無くなりましたが、本日はたくさんの貴重なご意見をありがとうございました。



～ 楠目先生からの手紙 ～ (後日談)

薬師神先生

先日は大変お疲れ様でした。「座談会」にはなりませんでしたね。すみません。まとまらなくなるのではと思い、事前に一度テーマや話題などをお伺いしたのですが、「薬師神先生がまとめてくださるので大丈夫」とお聞きして、特に準備もせずに参加しました。好き勝手な話しをしてしまい、申し訳ありませんでした。よく考えたら、会報に話したことが掲載されるのですよね。すみません、大幅な改変をお願いしたいと思います。

楠目としては以下のように意見をもっております。原稿を作られる際にご参考にしてください。

学生に対しては、

- ① よく頑張っていると思う。
- ② 余裕がなさすぎるので、dutyを減らせられたらお願いします。
- ③ 人生相談ができるような場所を設けてあげたい(必要なら協力します)。
- ④ 英語をもっと勉強してほしい(言うの忘れました)。

研修医に対しては、

- ① よく勉強していると思う。お母さんとしては皆誉めてあげたい(自分の息子は別として)。
- ② 前期研修が終わったところ(あるいは専攻医2年目か3年目)にでも、基礎実験するとか、他の学部勉強にいくとか、自分を見直す機会と時間を持つようにしたら良いと思う。
- ③ 将来のことをいろいろ考えている人が多い一方、発展性や夢が感じられない。1年先でなく、5年先10年先を考えて過ごしてほしい。
- ④ 毎年1つでもいいので、自分として新しいものに挑戦してほしい(医学や仕事だけではありません)。

母親として、また小児科医として思います。学生や研修医時代に締め付けすぎると、本当に働かなければいけなくなったとき、頑張る力がなくなってしまうのではないかと心配します。実際に患者さんを前にして仕事を始めたら、勉強せざる得なくなりますし、そこからの頑張りが、彼らを「医者」にするのだと思います。

育児みたいなものです。子どもを産むから母親になるのではなく、育てるから母親になるのです。赤ちゃんが母親にしてくれるのです。医者もそういうものだと思います。そのためには学生時代・研修医時代にエネルギー(夢や発展性につながる何か)をためておく必要があります。



ずっと前から大学に欲しいものがあります。小さい部屋でもよいので、誰でもちょっと話に寄れる部屋。そこにサンドバッグのひとつでもあれば、「クッソー(なんてはしたない)」と思って殴ってスッキリすれば、あとはリフレッシュして仕事出来るのになー、といつも思っていました。サンドバッグの代わりに、なんでも話を聞いてくれる人がいれば、もっと素敵だなと思います。

また、いっぱい書いてしまいました。有難うございました。

医学部ならびに愛媛大学でご活躍された先生



退任にあたって

大橋 裕一 (特別会員)

(愛媛大学 学長)

同窓会会員みなさま、こんにちは。6年間の学長任期も終わりに近づき、令和3年3月末をもって退任することとなりました。そこで、この誌面をお借りいたしまして、一言御礼のご挨拶を申し上げます。

私の在任期間は、本学の第3期中期目標期間とほぼ重なっており、この間、『輝く個性で地域を動かし世界と繋がる大学』をスローガンに、『地域貢献型大学』としての基盤作りに努力してまいりました。少子高齢化の波の中、地方大学にとって経営環境の悪化が懸念されてはいますが、今、新型コロナウイルス感染との共存を踏まえ、『ニューノーマル』という考え方が生まれつつあるのは一つの光明かも知れません。この機会に、地方分散への流れが実質化しないのか、切に願っているところです。

振り返れば、平成4年に眼科学教室の教授として着任以来、ほぼ半生をこの愛媛の地で過ごさせていただきました。もう30年ほど前のこととなりますが、初めて観光港に降り立った朝、夏の太陽の中を重信に向けて車を走らせた時のことは今もよく覚えています。ちょうど平井の坂の辺りだったでしょうか、私を迎えてくれた蒼い石鎚の山並みはとても印象的でした。それ以来、自分がお世話になった医学部を、そして愛媛大学をさらに発展させようという思いで、精一杯頑張ってきたつもりです。この間の皆さまの温かいご支援、ご助言に深く感謝申し上げます。

さて、愛媛大学医学部は、40年を超える歴史の中で、数多くの卒業生を県内に輩出し、地域医療レベルの維持向上に多大な貢献を果たしてきました。今後とも、人材育成、高度先進医療の拠点として重要な役割を担っていかねばなりません。将来の飛躍に向けて一番大切なのは、組織としての多様性の確保かと思えます。様々なバックグラウンドを持った有為の人材を幅広く集めることができるならば、自由で豊かな発想のもと、医学部はさらに力強く前進を続けることでしょう。大いに期待しています。

なお、退任後ですが、大好きなビートルズのGet Backの歌詞～Get back to where you once belonged.～に従いまして、今一度眼科医へと戻り、地域医療に微力ながらも貢献できればと考えております。きっとどこかでお会いすることとは思いますが、その節はどうかよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、薬師神会長率いる愛大医学部同窓会のますますの発展を祈念し、熱いエールを送らせていただきます。改めまして、長い間のご支援、ありがとうございました。



愛媛大学医学部と愛媛県立医療技術大学との絆

安川 正貴 (特別会員)

(愛媛県立医療技術大学 理事長・学長)

愛媛大学医学部同窓会の皆様こんにちは。今年(令和2年)4月から、43年もの長きに渡ってお世話になった愛媛大学医学部を離れ、愛媛県立医療技術大学に移った安川正貴です。愛大時代には大変お世話になりました。この場を借りて心よりお礼申し上げます。さて、薬師神同窓会長から同窓会会報への寄稿のお誘いを頂いたので、「愛媛大学医学部と愛媛県立医療技術大学との絆」という題で、両校の深い関わりについて紹介させていただこうと思えます。

愛媛県立医療技術大学(通称は、医技大、県立大、EPUなど)は、昭和63年4月に愛媛県立医療技術短期大学として、砥部焼で有名な「アートの里」砥部町に開校しました。聞くところによると、その前身となった看護学校があるようで、そこまで遡れば愛大医学部より歴史があるかもしれません。平成16年には4年制大学となり、平成22年の公立大学法人化を経て今日に至っています。初代学長は、愛媛大学整形外科教授であられた野島元雄先生で、私が6代目となります。これまでの6名の学長のうち5名が愛大ご出身で、教授を含めた多くの教員も愛大医学部から来られており、新天地に赴任したという緊張感はあまり感じません。また、多くの本学卒業生が現在愛大看護学科や附属病院でご活躍です。

本学は、1学部(保健科学部)2学科(看護学科と臨床検査学科)からなるこぢんまりとした大学で、看護師、保健師、助産師、そして臨床検査技師を育成する教育機関です。また、大学院や助産学専攻科も設置されており、高度医療人育成にも力を入れています。この中でも助産師と臨床検査技師は愛媛県では本学のみで養成でき、強みの一つとなっています。また、意外といっちは失礼ですが、教員は研究にも熱心に励んでおり、科学研究費の採択率は30%近くと全国平均を上回っています。私は教職員と協同し、本学が学生中心の大学(Student)、使命を果たせる大学(Mission)、国際性豊かな大学(International)、地域に根差した大学(Local)、そして愛媛に貢献できる大学(Ehime)、この5つの頭文字を合わせた「愛顔(SMILE)あふれる大学」になるよう努力したいと思っています。

愛媛県立医療技術大学は開学以来、多くの人的交流を通して愛媛大学医学部と強い絆で結ばれています。愛媛大学大橋裕一学長からは、「君の仕事は愛大との連携強化だ」と言われ送り出されました。これからも愛媛大学医学部とより一層力を合わせ、愛媛の医療の向上に尽力したいと思っていますので何卒宜しくお願い申し上げます。

恩師をおたずねします



愛大医学部の創設期に在籍した一人として

絹谷 政江 (特別会員)

(元第一解剖助教授、前医学部看護学科教授)

21世紀を生きていて、パンデミックなウイルス流行を、疫学の実践を目の当たりにできるとは思ってもみないことでした。保健所・病院など現場で対応されている皆様、ご苦労様です。高齢者にできる協力を、この2月から8月の間、自粛した暮らしの日々を過ごしています。

そんななか、ご依頼がありましたので、この際、愛大医学部の創設期に在籍した一人として、雑文でも記録を残しておくのも悪くないかとお引き受けしました。現在、医学部・附属病院で活躍されている1期生から10期生くらいまでの方々は、学生としてその熱気のなかで教育を受けられた方々。私は創設4年目の終わりから関わりました。

今でも有り難く思い出するのは、誰もが必死に医学部教育の体制を作り上げようとしていたこと、協力し合わないとならなかつたこと。講座の壁を越えて、お隣からも、上の階からも手が差し伸べられました。助教授として講座運営をしっかりとかわるべきと、助教授・講師会のメンバーから歓迎会と同時に発破がかかりました。教授間でもお酒を飲みながらの意見交換がしきりに、夢が語られておりました。風通しが良くて、学生たちにもきっとその心意気が伝播していたのではと当時を思い出します。医学祭を忙しくても盛り上げよ、自治会を作れ等、教授たちからエネルギーが注ぎ込まれておりました。事務の方々からも、協力せねばという気概が伝わってきていました。解剖学だったせいもあり、白菊会の会員様との関わりに、あるいはご遺体を集めるのにどれだけ学務の方々のお世話になったか。皆さん、それぞれの立場で胸を張って協力的に仕事していただけておりました。時には対等に、仕事仲間として。

そんな中で、各講座が自分たちの研究を立ち上げることも急務でした。早々と作り上げ、工場のようにフル稼働体制で実験されていた2内科、免疫学が爆発的なスピードで展開していた時期と重なり、内海先生の所のセミナーに廊下まで人が溢れていたこと、夏休みに内海先生直々に最新の免疫学の進歩について、学内公開で講座が開かれていました。何と時代に即応した、周りからの希望もあつてのことにしても、理想的で、憧れのまなざしで眺めさせていただきました。上原先生・小室先生が協力して、形態学いかにあるべきかを語り、飲み、学外から講義に来られた先生方との交流も、若手を同席させて巻き込み学ばせていただいたのも、後々役に立ち、有り難かつた思い出。院生や学生として、同席した面々のひとたちも何人かは研究者として活躍されていて、きっと同じ思いのことでしょう。

今はどう変化しているのか、現状を理解しないままに文章を書かせていただきました。きっと、後を受け継いだひとたちがさらに発展させ、熟成させてくれていることを念じて。皆さんのご活躍に期待しています。



アクビノでるまモナカットタ珍講義

三木 吉治 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科 皮膚科学 初代教授)

2020年6月始め、突然、医学部同窓会の薬師神会長から「恩師を訪ねる」という企画への寄稿を依頼されました。愛大医学部は1973年、戦後初の新設医大のひとつとして発足しました。念のため、当時の33名の教授の現在を医学部事務や薬師神教授にお聞きしましたが、まだ元気なのは4~5人だけのことでです。

本企画のトップを飾る「楽しかった愛大医学部での思い出」の詳細は、医学部と大学本部の図書館に寄贈したMIKI HOUSE '94、'97、2001を読んで頂ければと思います。私が大阪大学から本学に転勤してきたのは1976年で44歳でした。その時、愛媛大学医学部はまだ建築中で、10月にやっと病院が開院し、その準備のため、患者役の看護師さんたちが全員ジーンズを履いて現れたのには、失笑しました。私は、医学部学生の課外活動のうち、山岳部の顧問に指名されましたが、私自身は一度も山に登ったこともなく、学生たちとは、殆ど自宅か、市内の飲み屋で一緒に過ごしました。その結果、62歳で医学部を去るまでの18年間に、皮膚科入局数は中国人や韓国人も含めて50人になりました。毎年、同門会にも呼ばれています。

さて、教授職以外の役職は、殆どすべて前任者からの残りものの処理でした。57歳で病院長に選任時、それまで放置されていた大学病院での医療過誤に関する裁判の案件が3件もあり、連夜、事務官と患者の家まで通い、裁判を諦めてもらうのに熱中し、やっと解決。ほかに全国で最後の10大学にまで残っていた大学病院内事務のコンピューター化や、病床稼働率の改善のため、共通病床や超特別病室、無料の市民健康講座、救急部や透析治療部の開設に走り廻りました。

59歳で医学部長に選任されたときも同じです。創設以来10年を経て、新しい医学領域などを取り入れるためのカリキュラム改革、教養課程学生の医療体験実習、更に看護師不足に対する看護学科の開設です。62歳で教養部から突然推薦されて学長に選ばれたのも、それまで遅々として進まなかつた教養部の廃止と全学部の改革、理学部の大学院博士課程の新設でした。学長就任と同時に医師の仕事は終了し、医師会も退会。それまでの医療事故や過誤に対する訴訟の危惧もなくなりました。

しかし、医学部教授としての最高のご褒美は、多数の教え子たちのご厚意と高い医療技術で私と家内の健康が守られ、88歳の現在も楽しく暮らせていることです。感謝を込めて、平成8年3月から毎年、各学部の卒業生1名づつ(医学部は2名)に愛媛大学三木奨学賞と副賞を授与しています。資金はまだ50年分くらいはある筈ですが・・・。

最後に表題は、毎年のように、卒業生から頂いた感謝状の一節で、私の講義に対する印象だとか!



鮎川恭三第11代愛大学長と



当時の愛車フェアレディZ

第10回愛媛大学医学部同窓会近畿支部総会 報告

第10回近畿支部総会は、令和1年11月2日に大阪市北区のブリーゼプラザにて開催されました。近畿支部は平成12年に発足しましたがその後中断し、平成23年に再開、それからは毎年総会を開催してきており今回が10回目になります。今回の参加人数は59名でした。

第1部として、大阪大学大学院医学系研究科循環器内科医学部講師の小関正博先生に『脂質に質の違いが引き起こすImmunometabolic disorder - 動脈硬化、脂肪肝炎、乾癬のcutting edge -』と題して記念講演をしていただきました。小関先生、ありがとうございました。

近畿支部ではこのように毎回記念講演を同窓の先生にお願いして、up dateな内容を門外漢にもわかりやすく解説して頂き、固くなった頭に刺激を与えてもらっています。

総会議事のあとは第2部の懇親会に移り、乾杯の後はそれぞれ懐かしい顔、クラブの先輩後輩、また診療上のいろいろな情報交換など、あちこちに話の輪が広がっていきました。

総会は毎回持ち回りで各期の先生に担当していただいています。今回は13期橋田先生、18期山崎先生にお願いしております。ありがとうございました。次回担当幹事予定の先生よろしく願いいたします。

近畿支部は、近畿一円(とっても曖昧にしております)に居住、在職の方で構成されています。毎年多数の卒業生が近畿地方に研修医として就職してきていますが、個人情報保護の壁は厚くなかなか実態の把握が難しいところです。今回連絡のなかった方、また他地域の方でも近畿支部って何かおもしろそうだとお感じになった方、是非ご連絡下さい。お待ちしております。総会への出席も大歓迎です。

なお、令和2年開催予定でした第11回総会は新型コロナウイルス対策のため中止とさせていただきますのでご了承ください。新型コロナウイルスに直接対峙しておられる先生方もおられると思いますが、感染には充分注意して診療にあたっていただきたいと心より祈っております。

(文責 朴 信正 1期)



第18回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会 報告

コロナ禍の真っ只中に陥る前の東京都心で、例年通りの1月第4土曜日(今年は25日)18時半より、私学会館アルカディア市ヶ谷にて開催致しました。

司会進行・幹事は第18回総会なので、18期生の中村喜次先生。流石に循環器学会・講演慣れた気持ちよいテンポです。特別講演は贅沢な3題。

講演1「診断戦略と生涯教育」

獨協医科大学 総合診療医学 志水太郎 主任教授

ドクターGの志水教授が情熱を持って進めている診断戦略と生涯教育をコンパクトに解説頂きました。直観と評価分析。今後のご活躍が楽しみです。志水教授世代には同窓の若手を集める企画も期待しております。

講演2「心臓外科領域における低侵襲手術の最前線」

千葉西総合病院 心臓血管外科 中村喜次 主任部長

心臓外科のスーパードクターとなった中村先生からは、弁置換術と冠動脈ステントと1本バイパス術のダビンチ手術。それぞれ3時間と1時間半でできるそうです。愛媛大学時代の苦労(中村先生とは愛媛大学病院時代に、脳外科・心臓外科共同で、内頸動脈狭窄症・血栓内膜剥離術と冠動脈バイパスの直列手術を一緒にやりました)があつての今が旬。そろそろ大学教授就任の声が聞かれそうです。

講演3「実験動物におけるゲノム編集技術」

名古屋市立大学大学院 医学研究科 病態モデル医学分野 大石久史 教授

ゲノム編集技術を駆使する大石教授は世界から注目されています。この技術が人間の運命をどう変えていくのか、これからの活躍に目が離せませんね。

その後は、参加者全員から現職紹介と一言を頂き、楽しい時間を満喫できました。8期生・9期生も沢山集まって頂き感謝です。臨床、科学、病院経営、医療連携、趣味連携をゆっくりと広げて、楽しい集まりにしたいと思います。事務局を切り盛りした西井幹事長、ご苦労様でした。

来年も1月第4土曜日(2021年1月23日)に私学会館アルカディア市ヶ谷にて開催予約を取っておりますが、コロナ禍でZoom同窓会になるかもしれません。また、ご連絡させていただきますので、東日本支部の皆さん、そして、全国の皆さん、お気軽にご参加ください。再会できることを楽しみにしております。

(文責 酒向 正春 9期)



第1回愛媛大学医学部同窓会東海・中部支部総会 報告

令和2年2月1日、ストリングスホテル名古屋で第1回の支部総会を開催しました。東海3県を超えて長野県、静岡県から、また昭和54年卒から平成23年卒までの計39名の参加がありました。支部代表の村上信五(2期)の挨拶で始まり、富永真琴先生(6期)の教育講演「温度感受性TRPチャネルの生理機能」、そして、愛媛大学同窓会会長の薬師神芳洋先生(10期)を招待し「愛媛大学の今と昔と癌治療」のご講演を頂きました。懇親会は、西原健二先生(1期)の乾杯のご発声の後、愛知県出身で東海・中部支部の設立にも多大な支援を頂きました熊木天児先生(17期)に愛媛大学や重信の現況について、楽しいクイズと地元の景品まで持参いただき、会を盛りあげて頂きました。その後、2次会にも多くの方が参加され、母校や愛媛の話題で盛り上がりました。総会直後から、新型コロナウイルス感染症が拡大し、大変な時期となりましたが、一方で、中川雅裕先生(13期)が浜松医科大学形成外科の教授ご就任という大変喜ばしいニュースが入ってきました。第2回支部総会総会は、中川雅裕先生の教授就任祝賀会を兼ねて開催の準備をしているところです。



(文責 常任幹事 大石 久史 18期)

医学部課外活動(運動部)紹介

愛媛大学医学部 水泳部

代表 廣井 直也(医学科3年)

こんにちは。愛媛大学医学部水泳部です。

私たちは男子18人、女子21人の総勢39人で活動しています。以前から競泳経験者が多く在籍していましたが、最近では競泳未経験者や他の運動部と兼部している部員も増えてきており、これまでとは少し違った新しい風を感じます。練習は火木土曜日の週3日で、夏場は本学プール、冬場はアクアパレットにて練習に励んでいます。

参加している大会は医学部四国大会、医学部中四国大会、愛媛県短水路秋期記録会、西日本医科学生総合体育大会、および西日本コメディカル学生総合体育大会です。昨年度の西日本医科学生総合体育大会では男子総合優勝2連覇を達成しており、本年度での3連覇を目指して部員一丸となって練習に打ち込んでいました。しかし、本年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、医学部中四国大会、西日本医科学生体育大会等の主立った大会が全て中止になり、水泳部として参加する大会の大半がなくなりました。多くの部員が目標としていた西日本医科学生体育大会と西日本コメディカル大会が中止となったことはとても残念ですが、この気持ちを糧にして、来年度の西日本医科学生総合体育大会や西日本コメディカル学生総合体育大会で、個人にとっても団体にとってもよりよい結果を残せるように鍛錬していきます。

普段の練習では引退生の先輩方も多く参加してくださり、和気藹々とした雰囲気の中で活動しています。ただ楽しむだけでなく、よりタイムを縮めるために部員同士で互いの泳ぎについて熱心に語らったり、フォームを確認したりと自己鍛錬に励んでいます。

また、水泳部全体を通して非常に仲が良いです。現在は自粛していますが、休日には誘い合わせて自主練習に行ったり、一緒に食事をしたり、レジャー施設に遊びに行ったりすることも多いです。水泳は個人レースが多いのでチームワークを磨く機会は多くはないのですが、これら普段の交流がチームワークの基盤となっているのだと思います。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で例年とは異なった練習形態や大会・行事になってしまいましたが、来年度の大会を笑顔で迎えられるように今できることを精一杯頑張っていきたいと思っています。



愛媛大学医学部 女子バスケットボール部

代表 岩下 佳世(医学科4年)

こんにちは。女子バスケットボール部です。現在、プレーヤー11人、マネージャー2人の計13人で、週3回体育館で活動しています。6月にある四国大会、8月にある西コメディカル大会、西日本医科学生体育大会、10月にある中四国大会、12月にある四国岡山定期戦、3月にある西日本女子医系大会と、1年を通して様々な大会に向けて練習に励んでいます。

一時期はプレーヤーが6人しかおらず、なかなか満足いく練習ができない日々が続きましたが、その中でも様々な大会で優勝、準優勝等の結果を残せたことは自信につながりました。人数が少ない為できるメニューは限られてきますが、少人数という状況だからこそできたことも多かったように思います。お互いをよく知り、何度も話し合い、ビデオを見ながらチームに足りないものを考え、様々な練習メニューを試して試行錯誤しながら、チームとして大きく成長できたと思います。人数が少ないため、練習に入ってくくださった男子部のプレーヤー、OB・OGの先輩方には感謝してもしきれません。たくさんの方々に支えられながら活動できているということを切に感じました。

新型コロナウイルスの影響で最近では大会が全て中止となり、練習の成果を発揮できる機会がなくとても悔しいですが、部活動が再開したら、今後もすべての大会において優勝を目標に練習に励みたいと思います。OB・OGの先輩方が積み上げてきてくださったものを受け継ぎ、今後も精進してまいります。



医学部課外活動(運動部)紹介

愛媛大学医学部 男子バスケットボール部

代表 高橋 昂暉(医学科4年)

こんにちは。愛媛大学医学部男子バスケットボール部です。私たちは現在プレイヤー15人、マネージャー5人の計20人で週に3回、体育館(重信キャンパス)とトレーニングセンターで活動しています。数年前と比べると人数が減っており、一時期はプレイヤーが7人で試行錯誤しながら活動していた時期もありましたが、新入生が大勢入部してくれたこともあり、現在ではより活気づいて活動しております。

今年度のチームとしては西医体優勝を目指し、特にチームディフェンスの強化を重点的に練習してきました。このチームディフェンスというものは、先輩方からの教えを引き継いでいるディフェンスであり、

例年的に他大学よりもアドバンテージになっているところであります。「愛媛大学の伝統的なチームディフェンスでチームメイトを助け合いながら勝つ」という先輩方から引き継がれてきたことを後輩たちにも受け継がれていくよう、練習に励んで参りました。また今年度のチームとしては、数年ぶりにゾーンディフェンスを採用するといった新たな試みもして参りました。今年度は、新型コロナウイルスの影響で西医体を中心としてあらゆる大会が中止となり、練習してきた成果を出せず残念ではありますが、伝統を引き継ぎながら新たな挑戦をすることを今後も大切にしていきたいながら練習に励んで参りたいと思っております。

最後になりますが、このように安全かつ集中して練習に取り組んでいるのは、顧問の竹葉先生をはじめとするOB・OGの先生方のご支援があつてのことです。大変感謝しております。これからも支援して下さるOB・OGの先生方の期待に応えられるよう頑張りたいと思っております。



愛媛大学医学部 フットボール部

代表 岡 詠吾(医学科4年)

こんにちは。愛媛大学医学部フットボール部です。

現在、プレイヤー15人マネージャー9人の計24名(2020年8月現在)で活動しています。今年度はコロナウイルスの影響もあり長らく活動ができていませんでした。7月から少しずつ活動を再開し練習することができるようになりました。フットボール部では、プレイヤーの数が限られている中で練習メニューを工夫し、与えられた時間の中でお互いに高め合いながら日々の練習に取り組んでいます。グラウンド外ではいつも和気藹々としている雰囲気も練習が始まれば一転、みんなサッカーに対して真摯に向き合い、言い合いになることもしばしばです。

その努力が実を結び、昨年度は創部初のタイトルである中四国大会優勝を成し遂げることができました。西医体では惜しくも3回戦で負けてしまいましたが、年々着実にチームとしての力が上がってきています。今年度は多くの一年生を迎えメンバー一新、四国大会優勝、中四国大会連覇、そしてチームの最高目標である西医体優勝に向けて日々の練習に取り組んでいこうと思っております。

また、フットボール部は部員の仲も非常によく先輩・後輩やプレイヤー・マネージャーの垣根を越えて練習外での交流も多く行っています。その分け隔てない関係がチームワークの向上に直結していると思っています。

OB・OGの皆様にはいつも様々な形でサポートしていただいています。今年度は主要な大会が無くなり皆様にご報告ができないのですが、今後ともフットボール部を支援していただけたらと思います。



愛媛大学医学部 ラグビー部

代表 安井 悠真(医学科5年)

こんにちは。愛媛大学医学部ラグビー部です。私たちは現在プレイヤー23人、マネージャー3人の計26名で週3回医学部内のグラウンドや東温市内のグラウンドを借りて活動しています。大学からラグビーを始めたプレイヤーがほとんどで、経験者が少ない中で工夫しながら練習を行っています。私たちがこのように練習できることも支援していただいているOB・OGの先生方のおかげであると部員一同感謝しております。

私たちが一年間で参加している大会は、関西医歯薬大会、西日本医学生総合体育大会、中四国大会、県リーグです。去年までは部員の人数が少なく、怪我人が多かったため、出場できない大会もあり、近年ではなかなか結果を残すことができていません。今年の大会自体はなくなってしまったのですが、将来有望な新入部員が多く入り、また来年、再来年の大会で優勝できるように努力しています。

また、ラグビー部は普段から部員同士で集まることも多く、食事をしたり親睦会を開くこともしばしばあります。このことで部員同士の仲が深まり、チームワークにもつながっています。これからも医学部ラグビー部は楽しく活動し、また今後も支援して下さるOB・OGの先生方の期待に応えられるよう頑張っていきたいと思っております。



あ と が き

愛媛大学医学部同窓会で末席ながら役員をさせて頂いております解剖学・発生学の鍋加(なべか)と申します。

当講座で担当している解剖学実習もCOVID-19のため、予定通りの4月に開始することはできませんでした。結局2カ月遅れの6月に始まり、8月第1週までで何とか無事に履修内容の全ての実習を終了させる事ができました。

そのような中でしたので4月15日に開催された同窓会役員会は初のビデオ会議システムを用いたオンライン参加を認める形となりました。役員には臨床の先生方も多く、対面で参加された先生方にも十分に距離を取って頂いて参加して頂きました。カメラとマイクにやや不備がありましたが、問題なく役員会を開催する事ができました。

続いて8月1日にいよてつ会館で開催された同窓会総会は、特別講演にお呼びしていた6期生新城憲先生、27期生志水太郎先生が県をまたいでの移動が困難となり、急遽ビデオ会議システムを用いたオンライン講演をお願いする形となりました。お二方にはご迷惑をお掛けしましたが、無事遠隔での特別講演ができほっとしております。今年と同窓会総会は、会場のネットワーク環境やビデオ会議システムの状況など手探りではありましたが、来年度の同窓会総会は始めからオンライン中継を予定しております。特別講演の先生にもその旨ご了承を得る予定です。

そこで、この場をお借りいたしまして、愛媛大学医学部同窓会のFacebook ページを紹介させていただきます。URLは、

<https://www.facebook.com/groups/ehimedoso>

となります。アドレスはehime + med + dosoでehimedoso、のつもりです。二次元コードも載せておりますのでアドレスの打ち間違いが心配な方は、スマートフォンの二次元コードリーダー機能をご利用下さい。こちらのFacebook ページでは、同窓会総会の情報や卒業生の動向などを書き込みさせて頂いております。Facebook アカウントをお持ちの方は是非ご参加をよろしくお願ひします。なお、スパム対策のため、アカウント作成直後で友達0人の方は参加申請を出しても自動承認はされません。私が適宜手動で承認しております。お待たせして大変申し訳ございませんがご了承下さい。

先程申し上げました通り、来年度の同窓会総会および講演会はオンライン中継を計画しております。視聴方法その他の詳細が決まり次第、Facebook ページで情報を発信する予定です。よろしくお願ひします。

皆様もそれぞれ大変な状況かと思ひます。くれぐれもご自愛下さい。

愛媛大学医学部同窓会幹事 鍋加 浩明 (広報担当・26期生)



愛媛大学医学部同窓会 Facebook ページ



《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1. 個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- ・同窓会名簿の作成
- ・定期的刊行物(会報、名簿)の送付
- ・同窓会会費徴収のための業務
- ・事務連絡及び各種文書の送付
- ・支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

2. 個人情報の提供

会員から情報の紹介依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承下さい。

3. 個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用PCで独立した作業を行っております。

《次号会報原稿募集》

★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 正会員20名以上の参加
 2. 報告文、集合写真を提出(会報原稿)
 3. 会費未納者への納入勧誘
 4. 2年に1回

★学生海外研修留学報告・医学祭報告(学生会員)

学年、氏名を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 報告文、写真を提出(会報原稿)

《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

- 郵便振替NO. 01620-0-6644
加入者名 愛媛大学医学部同窓会
入会金を含む終身会費5万円

《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注)卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問い合わせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますので何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意くださいようお願い致します。

《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想など是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

お知らせ

第37回

愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。日程が8月第1土曜日に変更となりました。特別講演会も予定しております。詳細につきましては、HPに掲載予定です。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：2021年8月7日(土) 16時～
場所：松山市内を計画中
議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

連絡先

〒791-0295 愛媛県東温市志津川

愛媛大学医学部同窓会事務局

TEL：089-960-5989(受付 平日10時～15時)

FAX：089-960-5989

E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp

H P：http://www.m.ehime-u.ac.jp/dosokai/igaku/